

国際日本研究センター

International Center
for Japanese Studies

NEWS LETTER
ニューズレター

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
<http://www.tufts.ac.jp/common/icjs>

2014.2 No.

13

- ・公開研究大会「慶長遣欧使節400年—新出史料からみる時代と世界観—」開催
"A 400-year-old delegate from the Keicho era - a world view of the times and historical archives" public research convention P1
- ・講演会「ドイツ語になった日本語」報告 Lecture Report "Japanese Loanwords in German Language" P2
- ・対照日本語部門主催「外国語と日本語との対照言語学的研究」第11回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 11th Research Seminar ... P2
- ・日本の「知」を考えるシンポジウム2013開催 "Knowledge of/in 'Japan' in an era of globalization: perspectives from sociology, anthropology and Japanese Studies" Symposium ... P3
- ・「日本語・英語・中国語の対照研究と日本語教育」研究会報告 The 3rd Research Seminar "Comparative Studies between Japanese, Chinese and English for Second Language Acquisition" ... P3
- ・特任研究員紹介：ファム・ホアン・フン氏（ベトナム国立大学ハノイ校）Introducing ICJS Visiting Researcher : Dr. PHAM Hoang Hung, VNU P4
- ・2013年度 活動報告（10月～2014年2月） Activity Report (Oct 2013- Feb.2014.) P4

公開研究大会「慶長遣欧使節400年—新出史料からみる時代と世界観—」開催 2013年10月26日(土)
"A 400-year-old delegate from the Keicho era - a world view of the times and historical archives" public research convention Sat. 26 Oct., 2013

スペイン史学会主催、国際日本研究センターとラテンアメリカ美術史学会共催で「慶長遣欧使節400年」を記念する研究大会が開催された。2013年は支倉常長ら慶長遣欧使節一行がローマを目指して出航してから400年目の年にあたり、6月には仙台市博物館所蔵の遣欧使節関係資料がユネスコの記憶遺産に登録されている。

本センターが2009年9月に開催した講演会「大航海時代の日本＝スペイン関係」は、本センター設立後、最初に主催した講演会であり、ファン・ヒル氏(セビーリャ大学教授)の講演「日本におけるスペイン」は国際日本研究センターブックレットNo.1として刊行されている(日本語訳：平山篤子氏)。今回の研究大会はこの時に続き、日本とスペインの交流の歴史を新たな史料・視点で捉え、考える大変意義深い機会となった。

公開研究大会の報告者はカルロス・マルティネス・ソウ(Carlos Martínez Shaw)氏、ホムロ・エハルト(Romulo Ehalt)氏、浅野ひとみ氏、小川仁氏の4人であり、報告タイトルはそれぞれ順に、「Japón y el Galeón de Manila en la Era Keicho」(「慶長期の日

本とマニラのガレオン」)、「16世紀スペイン領フィリピンにおける奴隷制度」、「16-17世紀に請来されたキリスト教関連品に関する一考察」、「コロンナ家と慶長遣欧使節—コロンナ文書館蔵新出史料に見る両者の関係—」というものであった。

基調講演ともいえるソウ氏による日本(徳川家康・秀忠)とスペインとの間の外交原則の齟齬という指摘をはじめ、本学大学院生ホ

ムロ氏のスペイン本国とフィリピンにおける奴隷制度への考え方の相違という指摘にも学ぶところ大であった。また博多遺跡から出土したメダイや銅版面等を紹介され、視覚的にも大変興味深かった浅野氏の報告、コロンナ文書館新出史料を軸に新たな発見を語られた小川氏の報告も研究テーマの広がりを実感させるものであった。コメントーターの清水有子氏は日本キリシタン史、日本近世対外交渉史が専門であり、『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考』(2012年 東京堂)を上梓した気鋭の研究者であるが、適切なコメントによりそれぞれの報告の位置づけが明瞭になったといえる。報告後の質疑応答では、開催に尽力された立石博高学長をはじめ、フロアからも活発な意見交換がなされ、盛会裡に終了した。

(野本京子)



Lecturers: Martínez Shaw, Real Academia de la Historia, Spain; Hitomi Asano, Nagasaki Junshin Catholic University; Hitoshi Ogawa, Ph.D. program, Kyoto University; Romulo Ehalt, Ph.D. program, TUFS, Japan

In 2009 of establishment, the first event held in this center was "Japan's Age of Discovery - The Spanish Connection", a joint sponsorship with the Sociedad Japonesa de Historia de España. As a continuation of the previous installment, this was a great opportunity to reevaluate the historical interactions between Japan and Spain in the forms of new historical records and points of view. Shaw addressed the diplomatic discord between Japan (Tokugawa Ieyasu, Hidetada) and Spain. Romulo, a TUFS graduate student, discussed the controversy of slavery in Spain and the Philippines. Asano's take on the archeological excavation of historic Hakata ruins and copperplate engravings was of great interest, as well. Okawa's report on the new discovery in the historical Colonna archives made it clear that this research topic is extensive. During the Q&A session, university president Hirota, among others, actively took the floor and expressed their opinions.

(Kyoko Nomoto)



講演会「ドイツ語になった日本語」報告

Lecture Report "Japanese Loanwords in German Language" Fri. Sep. 6, 2013



2013年9月6日(金) 15時から17時30分まで、留学生日本語教育センターさくらホールでチュービンゲン大学日本学科のヴィクトリア・エシュバッハ＝サボー教授をお迎えして講演会を開催しました。エシュバッハ＝サボー教授は2005年から2008年までヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies)の会長を務めるなど、ヨーロッパにおける日本学研究(特に言語研究分野)で主導的な役割を果たしています。演題は「ドイツ語になった日本語」で、講演は日本語で行われました。概要は以下の通りです。

日本が西洋と文化的・経済的な接触を得て以来400年を過ぎ、その関係は様々である。そうした接触は言語の面にも見られ、日本語に多くの外来語・借入語が入ってきたのと同様に、日本語から他言語へも数多くの語彙が借入語として取り込まれた。今日では、日本語からの借入語は英語に最も多く見られるが、ヨーロッパの多くの言語にも日本語からの借入語が増加する傾向にある。英語への借入語は、すでに17世紀には古くから流入していた bonze, buppo, kannon という仏教用語など6語を含め61語が記録され、それが19世紀には416語、20世紀末には613語が英語の

辞典に収められている。語彙総数では1425語となり、アラビア語関係の2338語と比較しても、文化接触期間の短さを考慮すると、注目に値する数である。

ドイツの新聞・雑誌などを資料に分析・考察した結果、日本経済ブームやグローバル化を通じて新たに生じた接触を二層に分けることができる。つまり、1960年代、70年代は日本からヨーロッパへハイテクや伝統文化がもたらされ、80年代後半以降はゲーム製品やメディア機器、若者文化が流入した。それにより広範囲で日本語受容の潜在性が成立したと見ることができ、日本語が商品名として、あるいはコマーシャルで日常生活に入り込んできた。一方で、メディアで提示される「現実」と日常の現実とは相離反していく可能性があることも忘れてはならない。

講演後は、日本語からドイツ語に入った名詞の性の問題などについて活発な質疑応答が行われました。聴衆は約35名でした。(成田 節)



Lecturer: Prof. Dr. Viktoria Eschbach-Szabo (Japanese Studies, University of Tuebingen, Germany)

Professor Eschbach-Szabo, chairman of the European Association for Japanese studies from 2005 to 2008, is the head of the program for Japanese studies in Europe. Her lecture in Japanese is summarized as follows: In the past 400 years in which Japan and western countries shared their cultures and economy, there has been an increase in the number of borrowed words in their respective languages. In the 17th century there were 61 words borrowed from Japanese in English. Now there are 1425, which is noteworthy even in comparison to the 2338 borrowed words from Arabic, the language of countries that have been in contact for a long, long time. According to German newspapers and magazines, there were two phases of contact between German and Japanese. In the 1960's and 70's, due to the Japanese economic boom, Europe adapted Japan's high technology and traditional culture. In the latter half of the '80s games and media devices made their way into the youth culture. It was not unusual to find products made in Japan; thus, the use of Japanese brand names and advertisements became more common. (Takashi Narita)

対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第11回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 11th Research Seminar

2013年12月21日(土) 13:50 ~ 17:00

場所：東京外国語大学 語学研究所 (研究講義棟4階419号室)

発表者・講演者と題目

川上茂信氏(東京外国語大学)

研究発表「スペイン語の動詞体系：時制とモダリティ」

吉枝聡子氏(東京外国語大学)

研究発表「ゴジャール・ワヒー語の能格構文」

野田尚史氏(国立国語研究所)

講演「日本語とスペイン語のとりたて表現」

川上氏はスペイン語動詞の法体系・時制体系にみられる、動詞形式と意味とのズレあるいは絡み合いについて発表された。未来形が純粋に時間的に未来のことを述べるだけでなく、未来あるいは現在の不確実性や推量の意味を帯びたり、過去未来形が過去の事態の推量や非現実の意味を帯びる表現になったりという現象が、多くの具体的な例によって示され、研究者(Alarcos1975、Veiga2008等)による捉えかたの違いも紹介された。

吉枝氏の発表では、ゴジャール・ワヒー語(イラン語派、パキスタン-ゴジャール地域)の能格構文の基本構造が示された後、実



際の使用における格表示体系の(不経済なまでの)多様性が説明された。そして、ペルシア語からの影響下で主格構文へ移行したと考えられるタジク・ワヒー語のように、ゴジャール・ワヒー語も分裂能格性を一部に残しながらも主格構文へ移行する可能性もあるとされた。

野田氏は日本語学・日本語教育学研究を牽引しておられるが、もともとスペイン語専攻でいらして、日本語とスペイン語の対照研究(主題・ヴォイス、語順等)も進めておられる。今回は、両言語にみられる「とりたて表現」すなわち、「も、だけ、さえ」とそれぞれにほぼ相当する「también, sólo, aun」による表現を中心に両言語のとりたて表現についてまず紹介された。そして、日本語ではとりたて表現が使われる状況でもスペイン語ではとりたて表現が使われない例が示され、そのことから日本語とスペイン語を「高コンテクスト言語」と「低コンテクスト言語」という対立で捉えることの必要性が述べられた。

今回の研究会にも、本学教員・大学院生のほか学外の方々も含め30名ほどの参加者があり、活発な質疑応答や意見交換が行われた。次回の予定は、3月8日(土)である。(早津恵美子)



21 Dec. 2013 Lecturer: Hisashi NODA, National Institute for Japanese Language and Linguistics; Speakers: Shigenobu KAWAKAMI, Satoko YOSHIEDA, TUFS, Japan
Kawakami showed many detailed examples of deviations in verb forms and meanings when analyzing the mood and tense systems of Spanish verbs. Yoshie talked about the basic structure and syntax of Gojal Wakhi and introduced the practical usage of a variety of expressions. She also indicated possible changes in the future of the language. Noda introduced the similarities and differences between words such as "mo", "dake", "sae" and "también", "solo", "aun" in Japanese and Spanish respectively. There were approximately 30 participants (including instructors, graduate students, and visitors from other universities) attending this seminar who actively shared their opinions. The next seminar is scheduled to be held on Saturday, March 8th 2014. (Emiko Hayatsu)

日本の「知」を考えるシンポジウム2013開催

"Knowledge of/in 'Japan' in an era of globalization: perspectives from sociology, anthropology and Japanese Studies" Symposium

12月27日、プロメテウスホールにて日本の「知」を考えるシンポジウム2013「グローバル化時代における「日本」の知を考える：社会学・人類学・日本研究からの視座」が科研費基盤研究(C)(研究代表：岡田昭人)、国際日本研究センター共催で開催された。

3部構成のこのシンポジウムでは、第1部「グローバル化時代における『日本』の社会科学的知の構築とその流通」と題して、グレゴリー・プール氏(同志社大学)を司会に、岡田昭人・堀口佐知子(本学)の両氏、井本由紀(慶應義塾大学)、谷口龍子(本学ICJS)、Eyal Ben-Ari(Kinneret College on the Sea of Galilee)の各氏から報告がなされ、ディスカッサントの高山敬太氏(University of New England)からの発題があった。第2部は荻谷剛彦氏(University of Oxford)からの講演「教育知、研究知のローカリゼーションと日本の大学」。そして第3部は市瀬博基氏(本学)の司会で、山下真司(帝京平成大学)、荻谷剛彦、ましこひでのり(中京大学)、高山敬太の各氏によるラウンドテーブル「グローバル化時代の「日本」の知」。年末のあわただしい時期の開催であったが、豪華なメンバーから、すぐれた報告・講演・問題提起を聞くことができた。

グローバル化の波のなかで、学問領域全体において世界で「日本研究の減少傾向」が進行している。電子リソースが中国研究より少ないなどの物質的条件のみならず、ネイティブ・インフォーマントとしての自己に安住している日本国内の日本研究・研究者の英語圏への発信の消極性が、とくに人文社会科学系においてしばしば指摘

される。荻谷氏の言葉を借りれば、日本語という言語の特殊性のもと、卓越した翻訳能力や翻訳市場に規定されて、自己完結的な「日本」が出来上がってきた歴史は簡単には変わらない。ただし、輸入学問と日本語に集中するアウトプットなど、アカデミズムにおける「鎖国状態」は、今日の日本のアカデミアにおけるモビリティの停滞を生んでいる。それは日本政府のグローバル化の掛け声の一方で、簡単に解消されない現実である。こうした現実に対して、性急なグローバル化は問題の解決にはならないこと、さらに若手研究者の中短期的の在外研究でもいいから、海外の大学で研究教育に触れる機会を増やすことが、実は日本の知と大学のグローバル化の近道であると、冷静に説く荻谷氏の発言には説得力があった。同時に、性急なグローバル化＝英語化に目を奪われる現状を厳しく批判し、日本国内に存在する人文・社会科学系が課題にすべき諸問題のリアリティを説いたましこひでのり氏の発言も、価値あるものだった。総じて、大学を覆うグローバリゼーションの過熱ぶりを冷却するには十分なシンポジウムであったと思う。

参加者は40名弱だったが、これだけの質の高いシンポジウムを主催した関係者の労をねぎらいたい。

(友常勉)



27 Dec. 2013 Lecturers: by Takehiko Kariya, University of Oxford, UK; Eyal Ben-Ari, Kinneret College on the Sea of Galilee, Israel; Shinji Yamashita, Teikyo Heisei University, Japan; Keita Takayama, University of New England, Australia; Hidenori Mashiko, Chukyo University; Yuki Imoto, Keio University; Akito Okada, Sachiko Horiguchi, Ryuko Taniguchi, Hiroki Ichinose, TUFS, Japan

In terms of Japanese Studies in international academia, its decline tendency has often been pointed out. In the symposium, Reconsidering Knowledge of "Japan" in the Era of Globalization: From the view point of Sociology, Anthropology, and Japanese Studies, speakers analyzed this tendency from various perspectives. Takehiko Kariya from Oxford University, proposed that hasty globalization cannot resolve the closed-ness of and inactive mobility in Japanese academia toward international society. Rather, a trial to let send younger scholars to experience foreign institutes or universities could be more effective, even if the project is small-scale, said Kariya. In summary, in contrast to the fever of globalization, this symposium tried to calm down and respond to the situation. We had a very precious time and do appreciate the organizers. (Tutomu Tomotsune)

「日本語・英語・中国語の対照研究と日本語教育」研究会報告 2014年1月25日(土)

The 3rd Research Seminar "Comparative Studies between Japanese, Chinese and English for Second Language Acquisition"



国際日本語教育部
門主催による文法・
語用と教育シリーズ
第3回研究会が中会
議室にて開催された。

「視点」をテーマ
に、「言語類型論

(typology)から見た中国語と日本語の対照研究—視点を中心に—(彭広陸先生：当センター特任研究員・北京大学)、「目的語残存受身文」における目的語残存の条件について—中国語の対照という視点から—(于康先生：関西学院大学)の発表が行われた。彭氏は、中国語と日本語の「視点」の諸相について、語、連語、文、談話の各レベルで概観した上で、日本語は視点の一貫性が強く主語が一貫しているのに対して、中国語は動作の主体に視点が置かれることから、談話の中で主語が変わり得る点を指摘された。于氏は、受身により目的語の格が変化しない「目的語残存受身文」(NP1はNP2をVれる/られる)を、NP1とNP2間の所有と所属、全体と部分の

ような意味的なつながりの有無により2種類に分け、目的語と動詞がコロケーションである場合に目的語が残存しやすいことを指摘された。また、日本語の目的語残存文は、受影者を主語に取り立て、中国語は文のテーマを主語に取り立てる点も主張された。続いて、本部門のプロジェクト「母語をふまえた日本語教育研究」(英語、中国語担当は本学教員佐野洋氏、望月圭子氏)の一環として研究発表(テーマ「日本語・英語・中国語の結果表現：日本語・中国語の複合動詞、英語の句動詞・結果構文の対照研究」発表者：本センター特任研究員テレンス・シャア氏、同申亜敏氏、同福田翔氏)も行われた。類型的に見ると、SVO言語は補語が発達し、副詞との違いが明確であるが、SOV言語の場合は、動詞の後ろに結果補語を置くことができない。また、動詞の性質を比較すると、日本語と英語は状態変化や「完結性」(Telicity)が動詞に含意されていることから、結果補語が共起しなくても「達成動詞」となるが、中国語の動詞は「完結性」を持たないために、動作の結果を示すためには補語が必要となる点が指摘された。当日は、学内外の教員や大学院生が30名ほど参加し、質疑応答が活発に行われた。(谷口龍子)

25 Jan. 2014, Lecturers: Peng Guangle, Peking University, China; Yu Kang, Kwansei Gakuin University; Terence Seah, Shen YaMing, Sho Fukuda, TUFS, Japan
Prof. Peng Guang Le from Peking University, China discussed "A focus on 'focus', a comparative study of Chinese and Japanese from a linguistic typology perspective. Peng points out that the subject of a Japanese sentence is what remains consistent, while in Chinese actions and/or behaviors hold more importance and thus the subject may change within the discourse. Prof. Yu Kang from Kwansei Gakuin University, separated Object-retained Passive Sentences into two types, depending on the relationship of NP1 and NP2. Also, he insists that in Japanese, the experiencer become the subject, while in Chinese, the topic of the discourse becomes the subject. In addition, Terence Seah, Shen Ya Ming, and Sho Fukuda from the Tokyo University of Foreign Studies gave a presentation on "Resultative Constructions: Japanese and Chinese Compound Verbs and English Phrasal Verbs". In Japanese and English, change of state and telicity are included in verbs (i.e. accomplishment verbs), whereas Chinese verbs do not express completion so complementary verbs are necessary. (Ryuko Taniguchi)

国際日本研究センター特任研究員紹介

ファム・ホアン・フン氏 (ベトナム国立大学ハノイ校人文社会科学大学東洋学部日本学科講師)

Introducing ICJS Visiting Researcher

Dr. PHAM Hoang Hung, Lecturer, Japanese department, Vietnam National University, Hanoi



ファムさんは博報児童教育振興会の第8回「日本語海外研究者招聘事業」の招聘研究者として2013年10月から2014年3月末まで、6ヵ月の予定で東京外国語大学国際日本研究センターに滞在しています。母校のベトナム国立大学ハノイ校人文社会科学大学の大学院での研究テーマは「日本の武士」。幕末・明治維新をリードした武士＝志士たちの苦闘に、近現代のベトナムの知識人・リーダーたちの経験を重ねて研究しているそうです。母校で日本の歴史と日本語を教えているファムさんが、招聘研究者として選んだ研究テーマは、「幕末・明治期における和製漢語のベトナム語への影響」。ベトナムの漢語のうち中国由来のものは60%を占めており、これに対して和製漢語は数百語ほど。しかしそのなか

には「哲学」「文明」「社会」「経済」など、近代化に欠かせない言葉が含まれていました。和製漢語は、ベトナムの反仏独立運動の指導者であり、来日経験もあったファン・ボイ・チャウ(1867-1940)や日本に留学したベトナム人たちによってベトナムにもたらされました(3月4日には、ファムさんにその研究成果を国際日本研究センター主催のワークショップで報告していただく予定です)。現在、ファムさんは中国・韓国を研究している同僚たちと、和製漢語の伝達過程とその相互関係について共同研究を組織しているとのこと。また、ファン・ボイ・チャウと同世代のファン・チュウ・チンらが1907年に創設した、日本やヨーロッパにならった近代化教育のための学校機関「東京義塾」が発行した書籍の出版も企画しているとのこと。本学での生活は?という質問に「忙しいけれど楽しい」とファムさんは話してくれました。(友常勉)

Dr. Pham, our visiting researcher, stays in TUFFS in a plan of 6 months from Oct. 2013 to the end of March, by the fellowship of Hakuho Foundation. His graduate study focuses on "a Japanese samurai in the late Edo and the Meiji Restoration," in contrast to Vietnamese intellectual leaders' experiences for modernization in Vietnam. Now Dr. Pham studies the theme that how Japanese translation of western ideas influenced in modern Vietnam. These translated words and ideas were introduced by Vietnamese leaders of independent movement and students studied in Japan in the Meiji period. Although being busy for the research project and preparing for the lecture at ICJS on March 4th, however, Dr. Pham told, "I enjoy rest of the days in Gaigo."

2013年度 活動報告(10月～2014年2月)

Activity Report (Oct 2013- Feb.2014)

■講演会・ワークショップ等■

- 10月26日(土) スペイン史学会主催、国際日本研究センター、スペイン・ラテンアメリカ美術史学会共催「慶長遣欧使節400年—新出史料からみる時代と世界観—」マルティネス・ソウ氏(スペイン・王立アカデミー)、浅野ひとみ氏(長崎純心大学)、小川仁氏(京都大学大学院)、ホムロ・エハルト氏(東京外国語大学大学院)
- 12月21日(土)対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第11回研究会 野田尚史氏(国立国語研究所)、川上茂信氏、吉枝聡子氏(東京外国語大学)
- 12月27日(金) 国際日本研究センター共催 科学研究費(基盤C No.23531110 代表:岡田昭人)日本の「知」を考えるシンポジウム2013「グローバル化時代における「日本」の知を考える:社会学・人類学・日本研究からの視点」 荻谷剛彦氏(University of Oxford)、山下晋司氏(帝京平成大学・前東京大学)、Eyal Ben-Ari氏(キネレット大学)、高山敬太氏(ニューイングランド大学)、ましろ・ひでのり氏(中京大学)、井本由紀氏(慶應義塾大学)、岡田昭人氏、堀口佐知子氏、谷口龍子氏、市瀬博基氏(東京外国語大学)
- 1月25日(土) 国際日本語教育部門主催文法・語用と教育シリーズ第3回研究会「日本語・英語・中国語の対照研究と日本語教育」 彭広陸氏(北京大学)、于康氏(関西学院大学)、テレンス・シャア氏、申亜敏氏、福田翔氏(東京外国語大学・本センター特任研究員)
- 2月20日(木)国際日本研究センター共催国際ワークショップ「民衆の記憶と東アジアの民主主義」 金元氏(韓国学中央研究院)、戸邊秀明氏(東京経済大学)、李英哲氏(朝鮮大学校)、金閭愛氏、中野敏男氏、友常勉氏(東京外国語大学)

■会議歴■

- センター会議:2013年10月10日、11月11日、12月6日、2014年1月16日、2月6日
- 部門会議:2013年10月4日、16日、11月8日、12月5、6、20日、2014年1月10日

■今後の活動予定■

- 3月4日(火) 17:00～ 特任研究員ワークショップ「日本幕末・明治初期における和製漢語と現代ベトナム語への影響」 ファム ホアン フン氏(ベトナム国立大学ハノイ校人文社会科学大学)
- 3月7日(金) 14:00～ 国際日本研究センター共催 科学研究費(基盤B No.23310176 代表:野本京子)「(紐帯としての日本語)日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究」公開研究会「ブラジルの日本語・日本文化受容の一事例」 キタハラ高野聡美氏(リオデジャネイロ州立大学) コメンテーター:ましろ・ひでのり氏(中京大学)
- 3月8日(土) 13:50～ 対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第12回研究会 講演者:黒田龍之助氏(フリーランス語学教師) 発表者:黒澤直俊氏、野元裕樹氏(東京外国語大学)
- 3月18日(火) 13:30～ 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催研究会『「聖書の日本語」翻訳の歴史」 鈴木範久氏(立教大学名誉教授)

■ Symposia and Lectures ■

- 26 Oct.: Open Seminar "The 400th Anniversary of the Keicho Mission : the World in the Epoch through the New Documents" hosted by Sociedad Japonesa de Historia de España, co-hosted by ICJS by Martinez Shaw, Real Academia de la Historia, Spain; Hitomi Asano, Nagasaki Junshin Catholic University; Hitoshi Ogawa, Ph.D. program, Kyoto University; Romulo Ehalt, Ph.D. program, TUFFS, Japan
- 21 Dec.: "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 11th Research Seminar by Hisashi NODA, National Institute for Japanese Language and Linguistics; Shigenobu KAWAKAMI, Satoko YOSHIEDA, TUFFS, Japan
- 27 Dec.: Symposium "Knowledge of/in 'Japan' in an era of globalization: perspectives from sociology, anthropology and Japanese Studies" hosted by No.23531110 Scientific Research(C), Grants-in-Aid for Scientific Research <KAKENHI>, co-hosted by ICJS by Takehiko Kariya, University of Oxford, UK; Eyal Ben-Ari, Kinneret College on the Sea of Galilee, Israel; Shinji Yamashita, Teikyo Heisei University, Japan; Keita Takayama, University of New England, Australia; Hidenori Mashiko, Chukyo University; Yuki Imoto, Keio University; Akito Okada, Sachiko Horiguchi, Ryuko Taniguchi, Hiroki Ichinose, TUFFS, Japan
- 25 Jan.: The 3rd Research Seminar "Comparative Studies between Japanese, Chinese and English for Second Language Acquisition" by Peng Guangle, Peking University, China; Yu Kang, Kwansai Gakuin University; Terence Seah, Shen YaMing, Sho Fukuda, TUFFS, Japan
- 20 Feb.: International Workshop "Listening to the Voices of Subaltern: People's Memory and the Democracy in East Asia" co-hosted by ICJS by Kim Wong, Center for Korean Studies Materials, Korea; Hideaki Tonabe, Tokyo Keizai University, Lee Young Cheol, Korea University; Kim Eunae, TUFFS; Toshio Nakano, Tsutomu Tomotsune, ICJS, TUFFS, Japan

■ Meetings ■

- Center meetings : 2013 - 10 Oct, 11 Nov, 6 Dec, 2014- 16 Jan., 6 Feb.
- Division meetings: 2013 - 4; 16 Oct, 8 Nov., 5, 6, 20 Dec., 2014- 10 Jan.

■ Future Events ■

- Tue. 4 Mar.(17:00-) The 3rd ICJS Joint Researchers Workshop "The New Kanji from Late Edo to Early Meiji Period in Japan and its Impact on Modern Vietnamese" by PHAM Hoang Hung, University of Social Sciences and Humanities (USSH), Vietnam National University (VNU)-Hanoi, Vietnam
- Fri. 7 Mar.(14:00-) Open Seminar "Japanese-Language as a bond : Japanese Language and Japanese Communities in Abroad" hosted by No.23310176 Scientific Research(B), Grants-in-Aid for Scientific Research <KAKENHI>, co-hosted by ICJS by Satomi Takano Kitahara, Rio de Janeiro State University, Brazil; Hidenori Mashiko, Chukyo University, Japan
- Sat. 8 Mar.(13:50-) "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 12th Research Seminar by Ryunosuke Kuroda, Freelance Language Expert, Naotoshi Kurosawa, Hiroki Nomoto, TUFFS, Japan
- Fri. 18 Mar.(13:30-) Research Seminar "Japanese in the Bible - the History of Translation" by Norihisa Suzuki, Emeritus Professor, Rikkyo University, Japan

発行

東京外国語大学国際日本研究センター

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラ・グローバル 2F

TEL 042-330-5794 E-mail info-icjs@tufs.ac.jp URL http://www.tufs.ac.jp/common/icjs